

神を畏れ戒めを守る人生

コヘレト12章1～14節
2023年9月17日
松田 基子 師

世界の人口は、既に80億人を越えたと報じられています。それ程の人がいても、同じ人生を生きる人は一人もいません。この地上に人は生まれてくるのですが、生まれたからには必ずまた、死ななければなりません。しかし、誰一人として、この地上に、どれ程の時間、日数を生きることが出来るのか、それを自分で決める事は出来ません。一体、人間の人生とは何なのでしょう。人間は社会の矛盾の中に生きながら、そこで失望しないで、人生の目的、意義を見出す事が出来るのでしょうか。

今朝のコヘレトの言葉は、人生の空しさを見つめながらも、尚生きる事に価値を見出していく事を訴えている書物です。コヘレトの言葉とありますが、コヘレトとは、その役目、職種を表しています。人々を集めて、知恵の言葉を語る教師の事です。「集める者」という意味です。コヘレトの言葉1章1節には、

「エルサレムの王、ダビデの子、コヘレトの言葉」とあります。それは如何にも、ソロモン王を思わせる表現です。最高の智者と謳われた、ソロモン王だと見せかける事によって、コヘレトの語る言葉の価値を高めようとしているのです。

では、彼は何と言っているのでしょうか。まず発せられた言葉は、2節に、

「何と言う空しさ。何と言う空しさ。全ては空しい」と言う、悲観的な言葉です。この書には、空しいの原語《ヘベル》が、38回も使われているそうです。ソロモン王と言えば、最高の知恵の持ち主であり、栄華を極めた王として、人々がこの世に生まれて来たからには、

『あの様な人生を送りたい』
とする、幸福のモデルとされている人物です。
ところがコヘレトは、その口から、
「空しい。むなしい」

と言わせるのです。コヘレトは世の中に起こる様々な矛盾を見詰めて、空しいと言います。

8章の12節に、

「罪を犯し、百度も悪事を働いている者が、
なお長生きをしている。」

14節に、

「善人でありながら、悪人の業の報いを受ける者
があり、悪人でありながら、善人の業の報いを受
ける者がある。これ、また空しい」

とあります。コヘレトは特に、死についてこだわっているように思われます。

5章14節に、

「人は、裸で母の胎を出たように、裸で帰る。
来た時の姿で、行くのだ。労苦の結果を
何ひとつ持って行くわけではない。」

9章の3節には、

「太陽の下に起こるすべてのことの中で最も
悪いのは、だれにでも同じひとつのことが
臨むこと、その上、生きている間、人の心は
悪に満ち、思いは狂っていて、その後は死
ぬだけだということ」

と言っています。

コヘレトは、

『世の中は、矛盾に満ちているではないか、
正直に生きて、何になるのか。一生懸命に
努力して何になるのか。人間はどうせ、死ん
で行かねばならないのだから、人生無駄では
ないか』

と言っているかの様です。そう言う所に、自分の人生を重ね合わせて、共感する人は多くいます。ところで、私は、コヘレトの言葉を研究されている、東京神学大学の小友聡先生の、神学セミナーに行く機会を得ました。私にとって、それは新しい発見でした。これまで空しいという言葉のイメージから、人生をそう言うカラーで眺めていた私達にとって、

「空しい」
という言葉は、

『**儂**(はかな)い。頼りにならない。やりきれない。
無駄で、かいたがない』
と言う意味を持っていて、人生の意味を消し去って
いくように、思われます。

ところが、小友先生によると、

「**空しい**」

の原語、ヘブル語【ヘベル】は、コヘレトの言葉で
は単に、

『**短い。束の間**・・・と言う意味ではないか・・・』
と言っておられるのです。小友先生によると、
コヘレトのテーマは、

『人生は**束の間**、それは**神の賜物**であるから、
現世を喜び、楽しみ、全てを神様からの賜物とし
て、受け入れ、与えられた生を徹底して生きる
事を説いている』

と言っておられました。そこには、時代的な背景
がありました。イスラエルは、捕囚解放後も、他国
の支配の下にあり、時代と共に厳しさは一層増して
いきました。紀元前、3世紀以降、ユダヤ教世界
に、【**黙示思想**】が起きました。その特徴は、

『**現世は墮落して、破局に向かっているの**
から、この試練に対して、禁欲的に生きて、
来世で祝福を得る』

と言う考え方です。死後の祝福に、重点が置か
れていて、今を生きる事は、

『**ただ待ち望む**』

と言う、消極的なものでありました。黙示思想の代
表的な宗派に、

「**エッセネ派**」

と言う宗派がありました。エッセネとは、

『**敬虔な聖なる人々**』

と言う意味です。

厳格に律法を守り、伝統的なユダヤ教を守る
人達でしたが、彼らは、エルサレム神殿の主導権
を握っている祭司たちの、世俗化に対して、強く反
発して、神殿から離れ、自分達の信仰を守りました。
その代表的な教団が、

『**クムラン教団**』

です。彼らは死海の西北端から、1km程離れた
荒れ野で生活しました。その生活は、黙想と聖め
の沐浴、定められた断食、聖書の写本などの修道
生活を送って、終末に備え、死後の世界で、祝福
を受けることに望みを置きました。

コヘレトは、

「**その生き方に、否を突きつけている**」

と言うのです。黙示思想からすれば、来世に価値
があるのですから、現世は空しいものです。それ
に対して、コヘレトは、

「**神様は、**

『**矛盾する世の中であっても、生きよ。人生**
は神様からの賜物なのだから。生きよ』
と呼び掛けている」

と言うのです。

そう言われますと、コヘレトの言葉は、対論的に
書かれています。その対論の相手が、黙示思想
であることが分かります。今朝の聖書箇所は、
コヘレトの手紙12章です。人間の死を、詩的に
表現しています。コヘレトは、

『**良く生きる為には、死を見つめることだ**』
と教えています。3節から7節までは、死に向かう
高齢者の姿が描かれています。

私自身も高齢になり、納得するところです。

・「**その日には、**

(老いが押し寄せて来る日、人間の
肉体はどうなるのでしょうか)

・「**家を守る男も震え、力ある男も身を屈める**」

(建物が古くなると、あちらこちら、キンで
来るように、人間の肉体も、高齢になると、
筋力は衰え、膝はガクガク、手は震える
ようになり、腰も曲がって物は持てず、
我が身が重く、引きずって歩かなければ
成りません)

・「**粉ひく女の数は減って行き、失われ**」

(歯が抜けていく事です)

・「**窓から眺める女の目はかすむ**」

(視力も衰え、メガネ無しには物を見ることができません)

・「通りでは門が閉ざされ、粉ひく音はやむ」

(耳が遠くなって聞き取れず、理解出来ず、意志の疎通が難しくなり、会話が無くなる)

・「鳥の声に起き上がり、歌の節は低くなる」

(早朝に目が覚めるようになるのですが小鳥のかるやかな声とは反対に、音程は低く、調子外れになるのです)

・「人は高い所を恐れ、道にはおののき」

(高い所はあぶない、道は危険があると外出する気力も無くなってしまいます)

・「頭はアーモンドの白い花」

(白い花の様に白髪となり)

・「イナゴの終焉のように、」

(老衰で歩行は難しくなります)

・「アビヨナは実をつける」

とありますが、岩波訳では、

・「アビヨナは花ほころばす」

と訳されています。

(アビヨナはトゲのある灌木で、夏の夕に咲き、翌朝にはしぼむそうです。人生の終わりを現しています。)

・「泣き女による葬列が町を巡って」

(永遠の家となる墓地に向かうのです)

・「白銀の糸は断たれ、黄金の鉢は砕ける」

(高価な銀の鎖に掛けられた金のランプを表しています。ランプは命の象徴です。銀の鎖が切れると、どんなに高価な黄金のランプも、落下して砕け、最早用を成すことは出来ません。)

・「泉のほとりに壺(つぼ)は割れ、井戸車は砕けて落ちる」

(泉は命の象徴であり、壺も滑車も砕ける事は最早、命を保つ事はできない。死を意味しています。)

命の終わりを、この様に美しい言葉で表現しています。

7節に、

「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」

とあります。創世記の2章7節には、

「主なる神は、土の塵で人を形造り、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」

と記されています。コヘレトは、

『人間は元々神様によって、土の塵から造られ、神様から命の息を吹き入れられた存在なのだから、その終わりは、また元に戻される』

というのです。人間は生まれてきたからには誰も死ななければなりません。どんなに医学が進んでも、死は人間の必然なのです。

小友先生は、著書:【コヘレトの言葉を読もう】

(日本キリスト教団出版局 2022-8 版)

の中で、(P119)

「コヘレトでは、空しい(ヘベル)は、決して悲観的な空しいではありません。時間的な短さ、言い換えると、

『儂さ、束の間、瞬時』

と言う意味であって、それは人間に与えられている、生の時間を表現しているのです。このヘベルをどう生きるか、

『短いからこそ、束の間だからこそ、この時を徹底して生きよ。諦めるな。今、こうして生きていだけで、丸儲けではないか。』

その様に生きる事への、強烈な励ましのメッセージが込められています」

と記しておられます。

人間はどうせ死ぬのだから、空しいではなくて、死を見つめる事によって、即ち、

『メメント・モリ(死を覚えよ)の言葉の通り、

終わりを意識した上で、今を生きる事によってのみ、意義ある人生を送る事が出来る』

のです。人間が死ななかつたら、また、千年も生きると言うのなら、生の意味は見出せないでしょう。何も今、努力しなくても、その内に、その内に、との

思いがいつまでも続くでしょう。死を見つめる時、今の時間がとても貴重です。

『もう戻って来ない。』

今の尊さが分かり、一生懸命に生きようとするのではないのでしょうか。ですから、コヘレトは死が訪れる前に、12章1節で、

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに、

『年を重ねる事に喜びはない』

と言う年齢にならないうちに」

と勧めています。

コヘレト自身、人生の意義を求めて、9節に、記している通り、

「知恵を深めるにつれて、より良く民を教え、知恵を与えた。多くの格言を吟味し、研究し、編集した。望ましい語句を捜し求め、真理の言葉を忠実に記録しようとした」

と言っています。その結果はどうであったでしょうか。13節に、

「すべてに耳を傾けて得た結論。

『神を畏れ、その戒めを守れ。これこそ人間の全て。神は善をも悪をも、一切の業を、隠れたことも全て、裁きの座に引き出されるであろう』

と締め括っています。

コヘレトは、神様から与えられた人生を、忠実に生きる為には、

『神様を心から畏れ敬い、信じ、神様のいましめを守る事に尽きる』

と結論づけています。ただ、真の意味で、神を畏れ、戒めを守る人生が、どの様なものであるかは明らかにされていません。コヘレトには、まだ、イエス・キリストの到来も、再臨も見えていません。14節で、言われている裁きの座は、終末の審判を語るのではなくて、

「人間の業の全ては、神の支配に委ねられていると言う意味だ」

と小友先生は言っておられます。

しかし、今日、私達には、短い束の間の人生をエッセネ派の人々の様に生きるのではなく、反対に、この世に同化して生きるのでもなく、イエス・キリストによる永遠の命の約束を頂いている者としての、生き方が示されています。大きな恵みであり、素晴らしい事です。人生は確かに不条理に満ちています。何時、癌の宣告を受けるか、不治の病に襲われるか、どんなトラブルに巻き込まれるか、試練は何時襲って来るのか分かりません。

しかし、私達はそこで、絶望しないで済むのです。イエス様はマタイ福音書の11章28節で、

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」

と招いて下さっています。

イエス様は同じ一つの軛で繋がり、全ての痛み、苦しみ、重荷を共に負って下さるのです。

イエス様が共に居られるなら、どんな苦難も乗り越えられると言う、その事実は、多くのキリスト者によって立証されて来ました。もう既に召されて、故人となっておられますが、瞬きの詩人として神様、イエス様を讃え詩った水野源三さんの生涯は、この事を証しています。水野源三さんは、小学4年生の時、脳性小児麻痺になられ、手足の自由を奪われ、ものも言えなくなり、たった一つの意味伝達方法は、瞬きをすることでした。人間的に考えるなら、絶望の人生です。どの様に生きれば良いのか、それこそ空しさに押しつぶされる思いであったでしょう。

そんな源三さんの心に、生きる力が湧いて来たのは、イエス・キリストの福音でした。幸い聴力は残っていました。牧師の言葉、説教のテープ、ラジオの伝道番組を聴くことができ、聖書を開いて貰うと、読む事ができました。源三さんは、イエス・キリストを心から信じて、その心は全く造り変えられ

ました。

心から溢れ出てくる思いを詩に表されました。
その方法は、五十音図を壁に掛け、母親がその字を順次に指して行って、自分の望む字に来た時に、瞬きで合図をされると言うものでした。その様にして出来た詩集が、

「我が恵み汝に足れり」です。

その一つひとつ、どの詩からも、神様に愛されている確信に溢れた、透き通った心から湧き出てくる言葉が綴られていて、読む人の心を癒し、潤すのです。新聖歌の292番に、曲が付けられ歌われています。

“もしもわたしが 苦しまなかったら、
神様の愛を 知らなかった
多くの人 が 苦しまなかったら
神様の愛は 伝えられなかった
もしも主イエスが 苦しまなかったら
神様の愛は 現れなかった“

と詩っておられます。

神様を信じた時、不条理な苦しみの人生を神様はこの様に美しく、生きる人生に変えて下さったのです。私達の人生の旅、それは、神を畏れ、その戒(いまし)めを守ることです。今日の私たちは、神の戒めそのものであられる、イエス・キリストに従う事です。そして、そのイエス様にお逢いする日を照準に、今を生きることです。

イエス・キリストを心から愛する源三さんは、イエス様の再臨を待ち望んで、こんな詩を詠んでおられます。

“いつ どんな空から
おいでになるだろうか
そよ風まちかねて ひばり舞い上がる空
それとも ひまわりが太陽見上げる空
来たりませ 君なるわが主よ
来たりませ もろもろの悪をばほろぼし
来たりませ いつどんな空から
おいでに なるだろうか

コオロギが鳴きだし 夕月がのぼる空
それともふぶきが去り 星輝く空
来たりませ 君なるわが主よ
来たりませ もろもろの国をば
おさめに 来たりませ

と詩っておられます。

今日の私達には、エッセネ派にも、コヘレトにも分からなかった神の御子イエス・キリストがおられ、使徒信条の告白の通り、キリストが

「かしこよりきたりて、生ける者と
死ねる者とを審きたまわん」

事を信じています。罪深い私達は、その時、唯イエス・キリストの十字架の贖いに縋るのみですが、その日を望み見て、自分が死ぬべき存在であることを覚え、与えられている命を、人生を、あるがままに、イエス様が軛で繋がり共にいて下さる事を信じて、泣き乍ら、また、微笑みながら、一日いちにちを神様に感謝して、地上の旅路を精一杯生きぬいて行こうではありませんか。

お祈りをいたします。

命の与え主である、天の父なる神様

あなた様は私達一人ひとりを掛け替えの無い存在として、命と使命を与えて、この世に送り出してくださっていますのに、私達は命の尊い価値を知らうともせず、人生をはかなみ、不足ばかりを呟いている事をお赦してください。

御子イエス・キリストを、十字架に架けてまで、贖ってくださった命の尊さに、気付かせて下さり、どんな試練の日も、イエス様と軛を共にし、イエス様の再臨を想い描き、その日を望み見て生き抜く者と成らせて下さい。弱い私達をお助け下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。

アーメン。